

日中韓文化遺産フォーラム

水中文化遺産の 保護と活用

《日時》平成二十九年2月12日

10時～15時45分(9時30分開場)

《会場》九州国立博物館ミュージウムホール

福岡県太宰府市石坂4-7-2



主催：文化庁



九州国立博物館

ごあいさつ

主催：文化庁 九州国立博物館

水中文化遺産とは、海や湖などの水域に存在する、沈没船やその積荷などの遺跡のことをいいます。陸上と同様、水中にも多くの遺跡が残されています。これらは、古文書などの資料に記録されていない人びとの歴史を今に伝える貴重な資料です。たとえば、日本を代表する水中遺跡とされる長崎県松浦市鷹島沖で発見された元軍の沈没船遺跡とその出土品は、教科書で学んだ蒙古襲来の様子をより具体的に私たちに教えてくれるまたとない資料です。海は日本の対外交流の舞台です。その様子を伝える水中文化遺産の研究成果は、アジアとの交流をコンセプトとする九州国立博物館にとってきわめて重要な意味を持っており、当館の開館以来、このような視点にたった展示も行ってきました。

現在、水中文化遺産の調査・研究とその保護・活用は世界各地で進められており、日本でも海に囲まれた環境にふさわしい水中遺跡保護の実現を目指した取組が進められているところです。

この度、中国・韓国・日本を代表する専門家にお集まりいただき、各国の水中文化遺産調査や、保護・活用の取組についてご紹介する国際フォーラムを開催することになりました。本フォーラムを通して、東アジアにおける調査の先進事例をぜひ皆様にも知っていただき、今後の国際的な研究協力の促進に寄与したいと考えております。

平成29年2月 吉日



日中韓文化遺産フォーラム

水中文化遺産の保護と活用

【日時】平成29年2月12日(日)

【会場】九州国立博物館ミュージアムホール

Program

- 10:00-10:25 開会挨拶
文化庁長官 宮田亮平
九州国立博物館長 島谷弘幸
- 10:25-10:45 韓国における水中文化遺産の保護と活用の取組の歴史
イ・クイヨン
李貴永(国立海洋文化財研究所)
- 10:45-11:05 新安沈没船にみる活用とその意義
キム・ビョングン
金炳堇(国立海洋文化財研究所)
- 11:15-11:35 中国の水中文化遺産の保護と活用の体制
リュウ・リーナ
刘丽娜(西安交通大学)
- 11:35-11:55 南海1号沈没船の引き上げと今後の活用について
ソン・チュン
孙 键(国家文物局水下文化遺産保護中心)

----- 休 憩 -----

- 13:10-13:30 日本の水中遺跡保護・活用の現状と課題
禰宜田佳男(文化庁文化財部記念物課)
- 13:30-13:50 鷹島海底遺跡における水中考古学の歴史
池田榮史(琉球大学)
- 14:00-15:45 討論会「日中韓の水中文化遺産」
討論司会: 赤司善彦(福岡県教育庁)
李貴永・金炳堇・刘丽娜・孙 键・禰宜田佳男
・池田榮史・佐々木蘭貞(九州国立博物館)

閉会挨拶
九州国立博物館 副館長 伊藤嘉章



韓国の水中文化遺産の 保護と活用の取組の歴史



イ・クイヨン
李貴永
国立海洋文化財研究所

韓国の水中文化財保護の歴史は1976年の新安沈没船の発掘から始まり、今年で41年を迎える。韓国は地理的、地形的特性から、内陸地域より海の水中文化財の方が良好な保存状態にある。新安沈没船発掘以降、20余年間、主に古船舶の保存処理と展示分野に限られた形で投資や専門家の養成が行われてきた。しかし、2000年代以降、国家的な規模で文化財管理の強化を図るようになり、湾岸地域などの開発工事に際して水中文化財の探査が義務として課せられることになった。特に、2002年から国立海洋遺物展示館が水中文化財の調査を主体的に遂行することとなり、発掘・保存・研究・展示を総合的に担当する専門機関として発展を遂げてきた。2007年以降は、スタッフや予算が増やされ、恒常的な調査体制が構築された。国立海洋遺物展示館は国立海洋文化財研究所へと機関名を変更し、水中考古学専用の調査船の運用、西海水中遺物保管棟の建設など、泰安地域を中心とする新しい施設を準備中である。

韓国の水中文化財保護の歴史は40年とはいえ、実質的な発展が行われたのは2000年代以降といえる。そして、今後、解決していくべき課題も多く残っている。また、良質な専門家の養成が最も必要とされている。

Profile

文化財庁 国立海洋文化財研究所 所長

1962年生まれ

公州師範大学校 歴史教育学科 卒業

公州大学校人文大学院 歴史学科 修士課程 卒業

高麗大学校大学院 韓国史学科 博士課程 卒業

1995年から、国立中央博物館学芸研究士室、国立済州博物館(学芸研究士室長)、国立文化財研究所、美術文化財研究室長、国立古宮博物館展示広報課長などに従事。2013年5月から2015年2月まで国立古宮博物館長を務める。その後、文化財庁課長、国立海洋文化財研究所(海洋遺物研究課長)を経て2016年6月から同研究所の所長に就任、現在に至る。

主な著作

- 「宗廟祭禮の祭器と祭需の陳設原理」(論文)2013年
- 「百済冠象徴體系の變遷様相」(論文)2012年
- 「百済の金屬工藝の印刻技法と魚子文考察」(論文)2010年
- 「記録からみた韓國古代 漂流の意義」(論文)2003年

新安沈没船にみる活用と その意義



キム・ビョングン

金炳堇

国立海洋文化財研究所

韓国で水中考古学という学問の発達の契機となったのは、1976年に始まった新安沈没船の発掘であった。新安沈没船は中国・元の時代的大型国際貿易船で、中国の寧波を中心に東アジアを渡った、中世の海のシルクロードの交易船であった。

新安沈没船の発掘は韓国の国立海洋文化財研究所と国立光州博物館の設立の契機となった。当初、新安沈没船で発掘された遺物は国立中央博物館に保管・展示されていた。しかし、発掘遺物の現地での展示を望む地域社会の強い要望から、国立光州博物館が建立された。

新安沈没船は発掘当時、船体の引き揚げや保存処理が大きな問題とされた。そのため、木浦市に保存処理施設が設置された。ここは後に、アジアで発掘された沈没船の保存処理で先導的な役割を担う機関となった。以後、国立海洋文化財研究所として機構が拡大され、中国・日本等にも影響を与える水中発掘と船体の保存処理のモデルとなっている。

新安沈没船は博物館における展示、船体の保存処理方法の研究、その他、中世の海のシルクロードの研究など、さまざまな分野で活用することができる。また、中世の東アジアの社会・経済、造船技術、国際交易史、工芸美術などの分野での研究資料として、その意義を見出すことができる。また、韓国がアジアを代表する水中考古学の先駆的役割を果たしたのも、新安沈没船が契機となったといえよう。

Profile

文化財庁 国立海洋文化財研究所 水中発掘課 学芸研究官

1963年生まれ

建國大學院 史學科 修士課程 卒業

建國大學院 史學科 博士課程 卒業

1994年より国立海洋文化財研究所に就職し、現在は学術研究官として同研究所に所属。2003年から2015年まで国立木浦大学校考古学科にて講師も勤める。新安沈没船をはじめ韓国の水中遺跡の調査・研究に従事し、論文など多数執筆。

主な著作

- 「新安船の航路と沈没原因」(国際会議講演)2016年
- 「韓・中 古船舶の荷物積載方法の比較と研究」(国際会議講演)2008年
- 『水中考古学による東アジアの貿易関係研究』(単著)2004年
- 『新安宝物船 最後の大航海』(共著)2004年



中国の水中文化遺産の 保護と活用の体制



リュウ・リーナ
刘丽娜
西安交通大学

中国は1.8万キロの海岸線、6500余りの島を有し、内陸にも豊富な水域があり、多種多様で膨大な数の水中文化財が秘められている。中国の水中文化財に対する保護は1980年代末から始まり、管理体制とシステムの構築、重大項目の企画と実施、組織の構築と人材育成などが進められた。20数年の努力により、今では水中文化財保護体制は、ほぼ確立したといえる。本論文では、水中文化財の多元化、多様性と全体性、新しい水中文化財保護体制の内容及び水中文化財保護の空間的範囲の拡大など、中国の水中文化財の保護と活用の事例を紹介する。中国（香港地区含む）の水中文化財の調査の現状や重慶白鶴梁水中博物館－即ち世界第一号の水中博物館、南海1号沈没船におけるパブリック・アーケオロジーの原則の応用、水中文化財保護や引き揚げた文物の展示などを紹介する。

また、本論文の最後に、東アジアの水中文化財保護のための「合作保護機制（保護協力システム）」を構築するよう呼びかけたい。中国より提案し、中日韓での戦略的共同研究を展開することを希望する。水中文化財の保護と文明の伝承を目標とし、技術や情報などの共有を通して、国際的な水中文化財保護の協力体制の強化を目指したい。

Profile

西安交通大学 法学院 副教授

1981年生まれ

西安交通大学 文学学士/法学学士 卒業

イギリス・アバディーン大学 国際経済法 法学修士 卒業

西安交通大学・ウィーン大学 法学 共同博士課程 卒業

2010年からユネスコ（フランス）にて水中文化遺産保護条約事務局に勤務。2012年より西安交通大学法学院に就職し、2015年より現職（副教授）に就任。中国や水中文化遺産の保護行政、特に法律に関する研究の第一線で活躍する。

主な著作

- “Exploration and Analysis on Regional Cooperation Scheme for Protection of Underwater Cultural Heritage in South China Sea.”（国際会議講演）2016年
- 『中国水下文化遗产的法律保护』（单著）2015年
- 「我国二战前流失海外博物馆文物回归的国际法探析」（論文）2014年
- “Ownership of Underwater Cultural Heritage in the Area”（論文）2011年



南海1号沈没船の引き上げと 今後の活用について



ソン・チェン

孙 健

国家文物局水下文化遗产保护中心

南海1号沈没船は広東省の台山と陽江の境目の海域に位置し、1980年代末に発見され、後に全体が引き揚げられ、「海上シルクロード博物館」内に移された。我が国の水中考古における重要な発見であり、海上シルクロードにおける重要な遺跡でもある。

「南海1号」は積荷を満載した南宋時代の海外貿易用商船であり、発見された当時、船体はシルトの中に埋もれた状態にあった。船体は長さ約22メートル、幅9.9メートル残っており、尖った船首と方形の船尾、外板を重ねた構造などから、遠海航行に適した「福船型」であることがわかる。沈没した地点は、広東省の中部から西部への海上交通の主航路に当たり、古代中国から西洋諸国へ向かう「海上シルクロード」の要衝でもある。南海1号沈没船は、構造上完璧な水中遺跡として、秘められている情報量が極めて大きい。現在まで既に数万件の積荷と生活用品を発掘した（水中調査を含む）。なかでも、焼き物や鉄器、銅器、貨幣が最も多い。大量に発見される陶磁器類は、諸外国地域の市場の需要に合わせた貿易用品であり、造形や工芸など中国の陶磁器生産に大きな影響を与えたことがわかる。また、鉄器や銅器、絹などの工芸品や日常生活用品も当時輸出された品物である。船に積み込まれた大量の金・銀・銅などの硬貨は、宋の時代の高度に発達した商品経済が既に海外貿易システムに浸透していたことを示している。10世紀以降科学技術の進歩により、中国と諸外国の交流はすでに頻繁に行われ、海上シルクロードは最盛期を迎えていた。異文化間の交流は中国の南部で持続的に発展する南海海洋文明を形成し、それによって構築された文明圏は東洋と西洋を結ぶ懸け橋や窓口になっていたことがわかる。

Profile

国家文物局水下文化遗产保护中心 研究員

1965年生まれ

南開大学 歴史学 卒業

1987年、大学卒業後に中国歴史博物館に就職、1994年から水中考古学を専門とする。2009年から、組織改変に伴い国家文物局水下文化遗产保护中心に移り、現在に至る。南海1号沈没船を始め、数多くの水中遺跡・沈没船の調査に携わる。

主な著作

- 「广东“南澳1号”出水明代景德镇青花瓷标本钴蓝颜料研究」(論文)2016年
- 「绥中三道岗元代沉船的发现」(論文)2008年
- 「南海沉船与宋代瓷器外销」(論文)2007年
- 「从“南海1号”开始的二十年中国近海水下考古历程」(論文)2007年



日本の水中遺跡保護・活用の 現状と課題



禰宜田佳男
文化庁文化財部記念物課

日本ではこれまで、遺跡保護と言えば陸上の遺跡を対象としてきた。現在、遺跡は全国で約46万ヶ所（水中遺跡を含む）あり、地方公共団体に所属する専門職員約5,700人が、年間約8,000件の発掘調査を実施している。そのうち、水中遺跡は512ヶ所しかなく、発掘調査については年間1件前後ときわめて少ない。

これまでも、1868年に北海道南東部で沈んだ開陽丸や、滋賀県琵琶湖湖底にある粟津湖底遺跡（今から約7,000年前）などの調査がおこなわれたが、継続的ではなかった。したがって、水中遺跡の調査ができる専門職員は10人程度かと思われる。

2012年には、弘安の役（1281年）の蒙古襲来の戦場となった長崎県の鷹島神崎遺跡が史跡に指定された。これを契機に2013年から、日本でも水中遺跡の保護・活用に取り組んでいくことを目的に、文化庁で「水中遺跡調査検討委員会」を立ち上げ、検討を進めている。

今後、日本でも水中遺跡を保護し、活用する体制作りが求められる。日本の場合、遺跡の保護・活用は地方公共団体が行うことになっている。したがって、まず国が体制を整備し、それを受けて、地方公共団体にもそうした体制を整備することが求められる。

今回のフォーラムをはじめ、中国・韓国の取組を参考にさせていただき、日本の水中遺跡を保護し活用する体制を整備してまいりたい。

Profile

文化庁 文化財部 記念物課 主任文化財調査官
1958年生まれ
大阪大学 文学部史学科 国史学専攻 卒業

1983年に大阪府教育委員会に就職、大阪府立弥生文化博物館など勤務。2000年より文化庁文化財部記念物課へ異動し、現在に至る。日本の埋蔵文化財が適切に保存し活用されるよう、助言を行っている。

主な著作

- 『研究最前線邪馬台国』（共著）2011年
- 『考古学の基礎知識』（共著）2007年
- 『考古資料大観』石器・石製品 第9巻（共著）2002年
- 『古代国家はこうして生まれた』（共著）1998年



鷹島海底遺跡における 水中考古学の歴史



池田榮史
琉球大学

1281年、日本への侵攻を図ったモンゴル(蒙古)の軍船約4,400艘は、長崎県と佐賀県の県境に位置する伊万里湾において暴風雨に遭い、その大半が遭難した。長崎県鷹島の南海岸一帯では以前から元軍船に積まれていた陶磁器片や銅印などが採集されることで知られていた。

1980年からは本格的な水中考古学調査が始まり、この成果に基づいて1981年には鷹島の南海岸の総長約7.5km、沖合200mの範囲は、蒙古襲来に関する遺跡として文化財包蔵地に指定された。以後、この海域では、港湾工事などに先立つ緊急発掘調査が行なわれるとともに、鷹島町および松浦市教育委員会による確認調査が継続的に実施されてきた。

2005年からは発表者も科学研究費補助金を受けた調査研究を開始した。10年間にわたる調査研究の結果、海底面下に埋もれた元軍船の検出手法を確立するとともに、これまでに元軍船2艘の存在を明らかにした。

これらの成果を踏まえ、2012年3月には、鷹島神崎港の沖合約384,000㎡の海域が海底遺跡として日本で初めての国史跡に指定された。また、文化庁では2013年から水中遺跡に関する調査検討委員会が設置され、日本の水中遺跡の取扱い手法に関する検討が進められている。

Profile

琉球大学 法文学部 教授

1955年生まれ

國學院大學 文学部史学科 卒業

國學院大學大学院 文学研究科 博士課程前期 修了

1981年より國學院大學文学部考古学研究室助手、1984年より琉球大学法文学部史学科助手、助教授を経て、1996年より琉球大学法文学部教授、現在に至る。沖縄県文化財保護審議会委員、宜野湾市文化財保護審議会委員などを務める。また、長崎県松浦市鷹島神崎遺跡など日本の水中遺跡の調査・研究など精力的に研究事業に携わる。

主な著作

- 『沖縄陸軍病院南風原壕群』(編・共著)2010年
- 『古代中世の境界領域—キカイガシマの世界—』(編)2008年
- 『沖縄県史』(編・共著)2003年
- 『須恵器集成図録』第5巻(西日本編)(編・共著)1996年

討論会

司 会

赤司善彦(福岡県教育庁)

パネリスト

1. 李貴永(国立海洋文化財研究所)
2. 金炳堇(国立海洋文化財研究所)
3. 刘丽娜(西安交通大学)
4. 孙 键(国家文物局水下文化遺産保護中心)
5. 禰宜田佳男(文化庁文化財部記念物課)
6. 池田榮史(琉球大学)
7. 佐々木蘭貞(九州国立博物館)

Profile

1957年生まれ

明治大学 文学部史学地理学科 考古学専攻 卒業

1984年より福岡県教育庁文化課に勤務。九州歴史資料館、九州国立博物館展示課長などの役職を経て、現職に従事。主に古代の対外交流や古代山城の研究を行なっている。文化庁水中遺跡調査検討委員会委員などを務め、水中遺跡の保護と活用にも貢献。主な著作(共著)に『大学的福岡・大宰府ガイド』2014年、『もろこしのたからもの』2009年、『日朝交流と相克の歴史』2009年、『日本海域歴史大系第1巻古代』2005年などがあり、他論文など多数執筆。



[討論司会]

赤司善彦

福岡県教育庁
総務部 文化財保護課長

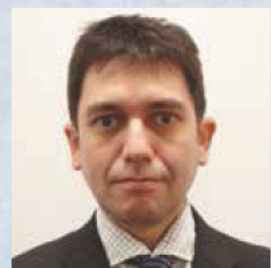
Profile

1976年生まれ

ミズーリ州立大学 人類学部 卒業

テキサスA&M大学 海事考古学プログラム 修士 卒業

2004年よりテキサスA&M大学保存処理ラボ専属カメラマン(研究員)などを務めた後、帰国。2013年より福岡市の埋蔵文化財調査課で嘱託職員として従事。2015年より九州国立博物館アソシエイトフェロー。水中遺跡・水中文化遺産の保護について研究。著作に『沈没船が教える世界史』2010年、『The Origin of the Lost Fleet of the Mongol Empire』2015年がある。



佐々木蘭貞

九州国立博物館
博物館科学課 アソシエイトフェロー

日中韓文化遺産フォーラム
水中文化遺産の保護と活用

平成29年2月12日
九州国立博物館ミュージアムホール

主催：文化庁 九州国立博物館

